十代の映画ノート

藤田　明　映画評論家

戦後、１９４５年の暮から５１年夏まで、十代の私は映画ノートをつけていた。「印象」と題し、計８冊。うち５冊が出て来た。あとの３冊は７９年、親元の火難で失われたはずで、５冊は奇しくも難を逃れたものである。「印象１」は４９年１月までだったのだろう。分厚いノートと記憶するが、今はない。２冊目以下はやや薄くなる。紙質は悪く、鉛筆書きで年々消えつつあり、文字面は私の寿命と共に消失していくに違いない。

まず、「印象２」の概略を再現していきたい。１９４９年２月から５月までの分、新制高校１年の３学期から２年の最初に当たる。

①２月９日（水）津養成小学校講堂、ソビエト映画『モスクワの音楽娘』☆。父と対立するオペレッタ歌手の娘。恋人も登場し、複雑になりかけたが、父は夢に新時代を悟って公演に足を運ぶ。共産党土橋氏演説会での併映、入場料無料だったか。☆一つは最低の評価。それでもノートの半ページ分、約千字ほど記している。

②２月２６日（土）津・新世界、アメリカ映画『聖ノリイの鐘』☆☆。バーグマンとクロスビーの組み合わせ、監督レオ・マッケリーとくれば『我が道を往く』、４６年度ベストワンを得た評判作だが、これは、その続編ともっぱら謳われた。「失望」と記しているが、尼姿のバーグマンや主題曲には好意的。ほぼ１ページ分４千字ほど。映連主催（上級生が独占していた映研の名、土曜午後の回に違いない）。

③３月１１日（金）久居・永楽座、松竹映画、木下恵介の『破戒』☆☆。池部良はダメで、桂木洋子に好意的。新劇の助演陣はいいとし、「自然の美しさ」にも注目。☆☆とは点が辛い感。再見したい小品である。期末テストを終えた直後だろうか。実は同じ小屋で旧制中学時代に、新協劇団の『破戒』を見ている（終わって薄田研二と私たちとの交流もマス席で行われたが）。その骨太があるため映画は抒情傾斜に見えたようだ。約２ページ。

④３月□日、津東宝、『風の子』☆☆☆☆。疎開の子を題材にしており、山本嘉次郎の戦後の作ではいい方に属している。後で考えれば『馬』を撮った経験も無視できない。その年のキネマ旬報ベストテン一覧表を見ると井沢淳５位、北川冬彦９位、飯田心美・時実象平１０位などで結局は１４位。

５位の稲垣浩『忘れられた子等』と作の出来に差はないのだが。私には☆☆☆☆であった。約２ページ半。

⑤３月２４日（木）永楽座、米『姉妹と水兵』☆。Ｊ・アリスンとＧ・ヘブンのデヨ姉妹、倉庫でのショウという趣向。コスターと別れたパスタナックに評の矢が飛ぶ。Ｖ・ジョンスン初登場。楽しんだ一編である。１ページ。

⑥３月□日、新世界か永楽座、松竹『わが生涯のかがやける日』☆☆☆☆。キネマ旬報で前年の５位。飯島正１位、岩崎昶・登川直樹３位。そんな影響もあってか、３ページ近く熱を込めた。山口淑子と逢初夢子の「カルメン」的けんか、山口と森雅之のキスシーン、黒沢の『酔いどれ天使』と比べて吉村公三郎の演出は大人だ。私も１位にしたいと記す。

⑦３月□日永楽座、米『悪漢バスコム』☆☆。絞首刑から逃れたＷ・ビァリーがモルモンの幌馬車の中へ入り込んで、少女Ｍ・オブライエンを知る。やがてインディアンと連邦警察隊の活劇、捕えられてバスコムと少女の別れ。面白いＢ級活劇だった。半ページ強。

⑧３月２８日（日）永楽座、米『ブームタウン』☆☆。西部の油田を巡る２人の男、ＮＹでの独占禁止法に触れた裁判、女性もからんで再び油田へ、という極めて米国的な話。ゲイブル、トレイシー、コルベールら５大スター、それにＪ・コンウエイの強引な演出。脂ぎった作、２ページ分。

⑨３月末か４月はじめ、永楽座か、松竹『花』☆。吉村公三郎１９４０年の旧作、新版公開の例だろう。華道と男女の話、大船調。田中、上原、高杉、川崎など出演。笠智衆と桑野道子の結婚もあり。岡村文子、近衛敏明をほめる。ＡＢ両人の対話体で評している。２ページ弱。

⑩４月４日（月）津東宝、ソ連『石の花』☆☆☆☆。４７年度公開でベスト９位に選ばれたものだが、時を経ても「ロードショウ」として特別料金を払わされたか。ソ連というよりロシアの芸術を見たという感想。３ページにわたって詳述している。総天然色はアグファ、それも一興であった。音楽も詩だとたたえている。

⑪４月□日　新世界、独『マヅルカ』☆☆☆☆。戦前ヨーロッパものの新版公開。東宝系に次いで松竹系もやっていた実例。Ｗ・フォルストの実験的構成で高名な力作。かつて評価した第一人者は南部圭之助だったか。今村太平も注目した一人である。「これまでデュヴィヴィエを神のごとく仰いだ私の持論は、この作品を以ってフォルストに移された」と４ページ強の激賞文は始まる。シエーンハウスのピアニストが

射殺された。それをめぐって娘のヨーク、母のネグリ。裁判を含むが、話術・構成こそ圧巻、映画ならでは、である。また、ポーラ・ネグリの素晴らしさ。一日に何度も見て、家の鍵を館内か、路上で紛失し、落胆したことを思い起こす。

以上で、「印象2」全52ページ中の22ページまでをたどってみた。27本中の12本ということになる。春休みも終わり、おそらく4月8日から新制高校2年生。共学も2年目で、しかも小学区制が三重県ではきびしく実施された。ところがそれに逆らうように、というべきか、4月11日(月)は名古屋で仏『しのび泣き』と浜松で英『大いなる遺産』、12日は米『らせん階段』。17日（日）から24日までは東京で、米『裸の町』、仏『旅路の果て』など計6本を見るといった有様。新しい担任M氏をあきれさせたに違いない2年のスタート時点となっていく。欠席理由を何と告げたのか、その辺からは次号で・・・